ヘミングウエイ試論

田　中　　博

1．序　文

「論叢」創刊号では，同じHemingwayのThe Snows of Kilimanjaroの短編を通じて，ヘミングウエイ文学の一端を研究してみたわけですが，永い間，彼の文学にかかわってみればみる程，ヘミングウエイ文学全体に対する疑問――特に，ヘミングウエイを高く評価するアメリカ文学というジャンルに，抵抗を感じざるをえない気持が，強くなってまいりました．私はもともとヨーロッパの文学を研究といいますか，興味を持っていましたので，ヨーロッパ文学とは，異質なものを感じておりました．このことは，多くの人々が，指摘されていますが，ヘミングウエイ文学を論ずるにあたって，そのことに少しふれておきたいと思います．ヨーロッパ文学とアメリカ文学について，福田恒存氏は，次のように述べておられます．「アメリカ人の脳裡には，現実にたいする大きな信頼があります．たとへかれらの進路をとざす憂べき事態がおこったとしても．あらゆる社会問題は，かれらにとって解決すべきものであり，解決可能なものとしてのみ存在するのです．それに反して，ヨーロッパでは，社会はつねに個人の意志を阻害するものとしてとらへられる．……」(1)と福田氏は，一般的にこう述べておられますが，ヘミングウエイの全作品を流れているものに対する私の疑問といいますか，彼の文学に対する不信感というものは，実はこの点にあるのではないのかと，思いつづけているのであります．それで，この小さい試論で，彼の文学作品全部を検討考察することは不可能ですので，特に「誰が為に鐘は鳴る」For Whom the Bell Tollsを中心にして，論じていきたいと思います．

2．本　文

ヘミングウエイの短編小説，長編小説，いずれにしても，彼の文体というものの，すばらしさについては多くの賛美者を持っています．又，彼が，シカゴ時代，リング・ラドナーの文体の影響を受けたこと．又，キヤンザス市の「スター」紙にいた時に受けた，ジャーナリストの心得としての「短い文章を使え．最初の一節は短かく力強い英語を使え．肯定形を使え，否定形ではなく．」の影響を受けたということは，定説になっています．ガートルード・スタイン女史からは，パリ時代，やはり同じように，直截に短かく書くようにと指導されたりしたことも事実であるらしいのです．完成されたヘミングウエイのあのclean-cutの文体は彼の秀れたものであると評価

されています．ハードボイルド・リアリズムとして，この文体こそ，ヘミングウエイの文学的特質——感傷の虚偽を排して，対象を正確につかもうとする——を特徴ずけるものではないでしょうか．ヘミングウエイが沢山の形容をつける言い方や，大げさな表現を極度にきらった文体は，実は，彼の小説の内容そのものの枠ぎめといいますか，秩序づけに熱心の余り，本当の内容からいくつもの大切なものを切り捨ててしまったのではないかという疑問を私は，持つにいたったのであります．文体を簡潔にする余り，内容を切り捨てたという表現のしかたには，飛躍が大きすぎるのですけれども．よくヘミングウエイ文学は長編小説よりも，短編小説に高い評価をする人々が多いのです．例えば，そのことは，佐伯彰一氏が，そのことを，実にてきかくに述べておられます．「歴史的な把握，ひろやかなパースペクチブというのは，むしろこの作家の『弱い』点なので，ある局部的な一面に，さらには人生の極限的な一瞬にせまく視野を限定することによる集中的な効果こそ，ヘミングウエイの得意の方法です．」(2)逆に，私は，彼の文学が避けて通っていった，諸々の世界に，心が残るのであります．このことは，「誰が為に鐘は鳴る」の作品検討の中で，少し深く考えていきたいと，思うことに通じていると思われます．彼の文体のことについて，述べることが，この試論の目的ではありませんので，最後に，志賀勝氏の次のような意見を引いて，止めることにいたしたいと思います．「ヘミングウエイのもつ現実性，無駄のない酷薄な真実，乾いた簡潔な文体というものは，もちろん彼の精神の世界からくることなのだ．大戦の記憶と虚脱の中で彼がよりすがろうときめたのは，肉体の耐力であり，また肉体的な感覚の魅力だった．本能を解剖することや心理を分析することや，そんな理性の働きというものに興味がもてなかった．」(3) と志賀氏は，いみじくも述べておられますが，この肉体の耐力と肉体的な感覚をたよりにするという，彼の思想が，実は彼の文学の限界を，明確にしてしまっているのではないかということを，指ししめしているのだと思うのです．ヘミングウエイ文学は，アメリカ文学というジャンルの中で，非常に高い評価を受け，米国では，一時，彼の文体そのものをまねる若い作家志望者をも生むほどの影響力をもった，文学でした．しかし，この試論を書く出発点は，この普遍的にまでもなっている評価に，深い疑問を持つに至ったことからなのでした．それでは，具体的にヘミングウエイ作品の中に，疑問を求めて，検討を加えることにしたいと思います．

ヘミングウエイはThe Sun Also Risesの中で，

Perhaps as you went along you did learn something. I did not care what it was all about. All I wanted to know was how to live in it. (4)

「人はいろいろやってゆくうちに，学ぶところがあるものだ．おれが関心をもつのは，それがなにかということではない．おれの知りたいのは，その中でどう生きるかということだけだ．」と，ジエーク・バーンズに語らせています．これは「思索ではなくて体験を信じる態度であり，一般的倫理ではなくて自分一個の行動の指針を掴もうとする精神である．そうして発見した唯一の信頼に値するものが，自己の肉体と感覚だけ．」(5)ということになり，これは実に見事な割り切り方ではないでしょうか．理性なんかくそくらえというような徹底的な逆説的な見事さ．あっぱれ

というほかありません．ただ，ヨーロッパの人間である，コリン・ウイルソンは，彼の最初の著作，「アウトサイダー」で，このことを，ヘミングウエイ文学の業績として評価しています．「アウトサイダーの生活は，かれの智能と感情を中心にしておこなわれ，かれは，ともすれば，プルーストのように密室にとじこもって，自分に肉体があることを忘れてしまう．ヘミングウエイの業績は，文学の世界に肉体感情を復活させたことであるが，かれは，D．H．ロレンスよりも巧みにそれをおこなっている」(6)かれの評価も一つですが，ヘミングウエイが，次のように言いだすにおよんでは，やはり，首をかしげざるをえないのであります．

So for afout morals, I know only what is moral is what you feel good after and what is immoral is what you feel bad after……(7)

「ところで，道徳のことだが，現在のところ僕には，やった後で気持がいいのが道徳的で，後で気持の悪いのが不道徳なことだとしか思えない．」肉体感覚の信頼の余り，このような自己中心的思考の矛盾性を見のがしてしまうわけにはいきません．ヘミングウエイはまた，人生のことについて，いろいろなところで，次のようなことを述べています．「原始，洞窟生活人のように生きよ．なるべく少ししか考えるな．食べ物と，性と，原始的スポーツとを最大限に用いよ．とりわけ考えることを避けよ．」(8)この「考えるな」こそヘミングウエイ文学の結論であるとすれば，これは非常に危険な思想といわざるをえません．自己を秩序で律して，感覚的判断でのみ行動する人間を肯定する彼の人間観は，一見実にそう快であり，スポーツ的〈肉体的力のそう快さ〉行動の美しさに，目をうばわれているうちに，実に危険な考えを，すらりと，読者に入りこませる魔力があると言えるのではないでしょうか．ですから，ヘミングウエイは，又こうも言ってみせるのです．「女にしたって，たたかったあげくひき上げるんじゃなけりゃ，シュークリーム人種のためにあるようなものです．相手に反撃のパンチを食らわしてやろうとするのに，グロッキーになっているんじゃ話にならない．実人生のむつかしい問題についても同じことが言える．」(9)原始的，スポーツ的，自己中心的な物の考え方は，実は，アメリカ人の物の考え方としての，「力こそ正義だ」という，根深い思想に，源流をはっしているようでもあるのです．彼のスポーツ好みは，伝説的なボクシングの話，戦争のまっただ中に在りたいという衝動，狩り，つり，闘牛師への熱狂的崇拝，アフリカのゾウ狩り，キューバ海での活躍，どれ一つを取っても，秩序を好み，肉体の力を信じ，耐え，肉体的行動の美しさを賛美する精神に根ざしていないものはないように思えるのです．この「力こそ正義だ」という考え方の，破壊的力を，過少評価をしているのではないかと思われます．スポーツマンの美しさ，肉体の力を極度に訓練し，その姿の肉体的疲労と，その感覚の自己充足には，涼々しい，人間の一面をのぞかせます．人間社会のわずらわしい，個人と個人の関係，政治の問題，イデオロギーの問題，理性による判断，宗教の問題，いずれをとってみても，複雑にからみ合う複合性，そういう日常性，ありふれたドロドロした世界の姿を，その根本に筆を切り込むことなしに，それらの枠を全部，切り捨てるやり方，個人的な力の充足，感覚の世界，秩序の世界と言う，ヘミングウエイの彼の好む世界の枠を作り出してみせる手法は，

極限の力の美しさにげんわくされて，読者が，ただただその主人公の額縁の中の個人的，主我的，行動の美というものに，そう快さのみをみて，満足をする非常に危険な一面的思想を持っているのではないかと危具するのであります．だから，佐渡谷重信氏から，次のような断定的な評価を受けざるをえない一面を持っているのであります．「ヘミングウエイにとっては戦争は小説の材料にすぎない．また，戦争は野球やボクシングと同様，一種のスポーツでしかない．……人間の一個の死についてよく観察するヘミングウエイが戦争における大量殺人，ないしは戦争がもたらす社会悪には全く無関心だった．」(10) そして他面又，前号の論叢で，取りあげました，キリマンジャロの雪の一節の中に，先輩であったFitzgeraldを露骨に批判した個所があります．もち論，最初は実名でしたが，現在の本では，余りにも露骨ですので，FizgeraldはJulianとなっていますけれど．

He remembered poor Julian and his romamtic awe of them and how he had started a story once that began, 'The very rich are different from you and me'. And how someone had said to Julian. He thought they were a special glamorous race and when he found they weren't it wrecked him just as much as any other thing that wrecked him (11)

「彼は気の毒なジュリアンのことを思い出した．彼が金持ちに抱いていたロマンチックな畏怖の念を思い出した．やっはいつだったか『大金持ちは君やぼくと人種がちがうのだ』という書き出しで小説を書いたことがあったけ．そうしたら誰かがジュリアンに言ったものだ．ところが，ジュリアンは，その言葉をユーモアととることができなかった．やつは金持が何か特別の魅力をもった人種と思いこんでいて，それがそうでないとわかったとき，そんなことでも気力をくじかれてしまったのだ．」ここにも，逆説的なPowerの崇拝があるように思えるのです．このエピソードについては，次のような社会学方面の著作からも，指摘されていますので，もっと明確にすることができるのであります．「彼は，金持であるということは銀行に大口預金をしているような単純な事実ではなく，一つの現実に対する見方，一連の生活態　，一つの特別な生活様式と理解したのであった．もし，金持ちについてのこうした理解が真実だとすれば，貧民については10倍も真実である．貧民には，彼らの歯の状態から恋愛の仕方にいたるまで，何から何まで貧困という事実が浸み込んでいる．ときにはこうした概念は，ヘミングウエイのような中産階級にとっては理解を絶したものになる．」(12) というふうに，彼にとって，切り捨ててしまった現実世界から，ひどい思想性の貧困さをまねくことになったのではないかと思われます．確かに，ヘミングウエイの青年期における，余りにも上品ぶった，プロテスタント的で中流的で，またそれら一切を得意に思う人々の住む田舎町，オーク・パークの町を，脱走したエネルギーは，この彼の原始的，野獣的な行動力なくしては，行ないえなかったのかもしれません．行為と意識の力を信じる余り，肉体的，感覚的力でもって，全ての世界を，支配しようとしたことが，彼の文学の限界を非常に浅いものにし，また一般的に，本当はこんな概念的な，大ざっぱな物のとらえ方はさける

べきでしょうが，ヨーロッパ文学，特に理論的で，社会的で，精神的で陰のある文学と，別世界のものとしているのではないでしょうか．前出の福田氏も，そのことを繰返し，「フォークナーやヘミングウエーは，肉体とかその情念とかいうものを信じてをります．ことにヘミングウエイについてはさういへませう．」(13)と述べています．以上大ざっぱではありますが，ヘミングウエイ文学の特質，同時，欠点（限界）を取扱かってまいりましたが，ヘミングウエイが，時代の流れや，批判の声に超然としていたわけではありません．あの第二回全米作家会議での，フアシストに対する非難の声明，それにつづく作品でのもさくがあったことは，事実でありました．そして，そういう彼の社会に対する連帯責任という意味での思想をもりこんだ最高作と評価されている，「誰が為に鐘は鳴る」を，少し詳細な検討を加えて，本当に，個人の社会に対する連帯責任や，コペルニクス的転回が，存在したのかどうかを，知りたいと思うのであります．ところが，この作品を少し読んでみますと，種々，論理性に欠けている記述や，不毛性に，すぐ気がつくほどなのです．今まで論述してまいりました，彼の力の思想を見つけ出すのは容易であります．それは，谷口陸男氏が，この作品の主人公，ロバート・ジョーダンの本質について，次のように究明されているのをみても，明らかであります．「この男は……極言すれば，彼の行動の結果がフアシズムのためになろうと，自由主義陣営のためになろうと，それはどうでもよろしい，唯，行動がありさえすれば，それでよいといった男なのである．」(14)又，結論めいたことを述べるのをゆるしてもらえるならば，この「唯，行動がありさえすれば，それでいい……」ということが，ヘミングウエイの実生活の例を，前にも述べましたけれども，あの上品な，中流階級的，プロテスタントの町，オーク・パークを脱け出した彼の思考形式の，あらゆる疑善の世界の，センチメンタルな世界をたち切った後のカオスの中に見出したよりどころが，この行動あるのみという思想，ではなかったのでしょうか．これは，一見して，行動の美しさ，肉体感覚，現世肯定，の中に，ひそむ危険さを内包し，羅針盤を持たずに，船出するに等しい旅路ではないのでしょうか．谷口氏の，ロバート・ジョーダンの本質の指摘につづいて，野崎孝氏が，この作品を，彼の著作の中の「ヘミングウエイとフアシズム」という章で，適切な分析をされていますので，氏の力を借りて，そのことをもう少し深く掘り下げておいた方がよいかと思われます．「誰が為に鐘は鳴る」の主人公，ロバート・ジョダンは，モンタナ大学でスペイン講師として勤務するアメリカ人青年であり，1936年から１ケ年の休暇をとって，スペイン内乱に参加したのでした．このことは実は何を意味しているのでしょうか．又なぜ，アメリカ人である，ロバート・ジョーダンが，スペインの内乱に，身を挺して，参加したのでしょうか．実際に，作者である，ヘミングウエイのスペイン内乱にかかわった事実を，思い描きながら，作品は，作品として，その書かれた事実から，検討を加えていきたいと思います．

He fought now in this war because it had started in a country that he loved.....(15)
「自分の愛する国に起ったがゆえに，これに加わった.」

.....he believed in the Republic and that if it were destroyed life would be

unbearable for all those people who believed in it. [16]

「彼は共和主義の信奉者だった．もし戦に敗れたら，共和主義を信奉するこれらの人々に，どんな悲惨な生活が，起ることだろう.」とこう主人公に言わせておきながら，ヘミングウエイは，平気で，次のようなことも，語らせるのです．

What were his politics then? He had none now, he told himself. [7]

「では，彼の政治的意見はどうなのか．いまのところはなんにも持ってはいない．」このことを少し考えてみますと非常に変んなことに気がつくでしょう．政治的意見をもたない共和主義者という，おかしなロバート・ジョーダンなのです．こういう矛盾を指摘しますと，ヘミングウエイ支持者からは，次のような弁論をきくこともあります．彼は，個人的倫理を追求する作家なのだから，そのわくを越えたこの作品は，失敗なのだと．それでは逆に，人間世界を扱う文学というジャンルの中で，個人的倫理という狭い範囲で，文学が文学として成立しえるのかという根本の問題を，すり抜けて通ってしまっているのではないかという疑問を，私は持ちます．このことはもう少し後にゆずるとして，野崎氏の意見を引いて，前に進みたいと思います．「政治的意見を持っていないとすれば，彼の行動を支えているものは何なのであろうか．ヘミングウエイは，それを，『自由・平等・博愛』というフランス革命の理想におき，『生命，自由，ならびに幸福の追求』というアメリカ独立宣言の理想に求めるわけだ．……これだけでは，外国人の彼が，いわば必要のない戦争にわざわざ参戦した理由——フアシスト政権の樹立をはばもうとする戦争に挺身する理由——として，いかにも薄弱ではないだろうか．アメリカ民主主義の基本理念の正しさを（おそらく経験によって）信じたにすぎぬ青年が，政治的意見をもたず，明確な社会観もなくして，どうして反フアシズムの立場に立ったのであろう．フアシズムを支持した多くの民衆だって，フアシズムこそ，生命を保証し，自由を確保し，幸福を約束する政治形態であると信じていたのではなかったか．」[18] と彼は疑問をなげかけています．前出の意見は，作品の次のような文章を参照に引用します．

You are not a real Marxist and you know it. You believe in Liberly, Equality, and Fraternity. You believe in Life, Liberty, and the Pursit of Happiness. [19]

「おまえは真のマルクシストではないし，おまえもそれを知っている．おまえは『自由，平等，博愛』の信者なのだ．おまえは，『生命，自由，ならびに幸福の追求』の信者なのだ．」引き続き戦争参加の意味を，彼は，彼自身に向って理論づける．

Don't euer kid yourself with too much dialectics. They are for some but not for you. You have to know them in order not to be a sucker, You have put many things in abeyance to win a war. If this war is lost all of those things are lost. [20]

「弁証法に凝りすぎて，自分をだますな．弁証法なんて．だれかほかのやつのためで，おまえのためのものじゃないのだ．おまえはただ搾取者にならないために，それを知っていなければならないだけだ．おまえは，この戦争に勝つために，じつにいろんなことを中途半端に投げやりにし

ている．もしこの戦争に負ければ，そうしたいろんなことも，みんなうしなわれるのだ．」以上の，楽観的認識，社会連帯感，で外国人が戦争に加入していく，恐ろしさは，やはり一考するにあたいすると思われます．戦争と平和という二つの概念を，明確に定義出来る，あるいは定義するところに，外国人の気安さが，主人公にありはしないのだろうかと懸念します．前出の佐渡谷氏は，そのヘミングウエイの思想そのものを，前述の如く，ヘミングウエイにとって，戦争は単なる材料ときめつけたあと，強く，彼を悲難しています．「アメリカにおける危険な思想家とはまさにヘミングウエイをもって筆頭としなければならない．にもかかわらずヘミングウエイは偉大な作家だという．しかし，それはアメリカにおいてのみ通用する『偉大』さであって，けっして世界に通用しない．われわれ作家としてのヘミングウエイを信用するわけにはいかない．」[21] 彼の危険思想，たとえば彼の個人的倫理にしても，倫理そのものも，前述したように，いささか，主我的で感覚的で，強引な倫理感には，私自身，信用するわけにはなかなかならないのですが，百歩譲って，彼の目ざすところは，キリマンジャロの雪をいただいた山頂であったとしても，確かに理想の姿は，同じ概念にしても，その現実的具体的，実現のプロセスの正しい認識を，提示しないところうには，極端に言えば，その理想像は，摩薬かアヘンにすぎなくなる危険性を持っているものであります．

Here in Spain the Communists offered the best discipline and the soundest and sanest for the prosecution of the war. [22]

「このスペインでは，共産党が戦争遂行のために，最善の訓練ともっとも健全にしてもっとも真剣な人々を提供した」からであり，

……in the conduct of the war, they were the only party whose programme and whose discipline he conld respect. [23]

「彼らは，戦争のやり方という点では，彼にとって尊敬できる計画と訓練をもった唯一の党であった．……」前出の引用からも，わかるように，彼はマルクシストでもないし，弁証法などくそくらえという態態度でありますし，共産党にロバート・ジョーダンの訓練と身をまかせる理由がこうであれば，野崎氏，や谷口氏だけでなくても，次のような判断を下そうとするのは，やむえないのではないかと思われます．「同様の，理由から，フアシストたちの訓練と指導にも身をゆだねないとは限らない．あのナチス・ドイツの優秀きわまる軍隊は，戦争の遂行のために，最善の訓練ともっとも健全にしてもっとも真剣な人々の集団ではなかったか．彼らの戦争指導にもとづく計画と訓練もまた，共産党のそれにまさるともおとらぬ尊敬を，この政治的意見をもたぬヒューマニストの胸中にかち得たであろうことが，十分推察できる．このように見てくるならば，谷口氏のいう通り，このロバート・ジョーダンという人物は，フアシズムのためにも献身しかねぬ男と思われてくるのではないだろうか．」[24] 右でも，左でもすんなりと受け入れるような行動様式や思考形式を内包し，口あたりのいいアクションとラブ（もち論，彼の文学の場合，大抵は，完結しない，不毛性を持った愛を好んでえがきましたが）で，知らず知らずに万人の胸を高なら

せる作品を，同じように賛美をもってむかえ入れることは出来ないのであります．大きな社会的状況の中で，政治思想の本質を，明確に理解し，その普遍化に努力を払うことなしに，戦争を語り，戦争参加の賛美を語るには，余りにも，楽観的幼児思考であり，危険と云わなければなりません．人間社会の在り方に深い考察をほどこすことなしに，こういう考え方，そのものは当時のアメリカ社会には濃厚であったとしても，作家として，人間を語る以上，その文学の真実味というものを疑いを持って，責任を問われるのは当然といえましょう．ヘミングウエイ文学の偉大さを指摘するに際して，多くの人々が，彼のハード・ボイルドで，ストイックな人間像を描がかせれば，彼をおいて他にないと賛美するのではありますが，本当に彼が，個人的倫理にもとずいて，人間を描いているでしょうか．複雑な社会状況から，政治も，宗教も，思想も切り捨てて，純粋培養をしたような人間を，描いてはいないでしょうか．少なくとも，活劇的人物像に，二重映しになる，主人公像は，戦争の重みを通俗的なものに転換していますし，又，第２回全米作家会議での激越な調子のスピーチは，一つのポーズになり下ってしまっています．個人的，主我的．利己的倫理，あの「やった後で気持のいいのが，道徳的で，後の気持の悪いのが不道徳的」という考え方や，「考えるな，深く考えるな，行動せよ．」という考えでもって，

I am going back and earn my living teaching Spanish as before, and I am going to write a true book. (25)

「帰国したら，前のようにスペイン語を教えて生活費を稼ぎ，そして真実の書を書くつもり」であり，それを行なうことは又，

I'll bet that will be easy. (26)

「きっと，むづかしいことではないにちがいない．」を確信深げなのであります．この「真実」という言葉は，スパーマーケットに売りに出された，目玉商品のように扱われているのではないかと考えさせられます．都合のよい時には，社会変革を肯定したり，否定したり，感覚に，こころよいか，悪いかで，自己判断をしたり，考えることを停止して，力にのみたよって行動を起こすような思想の持ち主の，真実の書に，私達は信用をおくことが出来るでしょうか．不用意で，筆のはしりすぎた言葉であるとするには余りにも重い，彼の言葉使いであります．ヘミングウエイは，この「真実」とは，単に自分自身の目でみて来た事実を，書き記すことぐらいにしか，受取っていないように見えるのです．「考えるな，行動せよ．」の彼の発想の貧根性はここに至って，明確な形を露呈しているものであります．彼も，「氷山の堂々たる動きは，８分の１しか水面に出ていないところから来ている」と，概念的には理解しながら，事実の下にある真相，経験的事実のもっている内面的意味というものを，真実，文学に具体化することに失敗していると判断されてもやむをえないのであります．ドライザーやドス・パソスが，えがいたアメリカ社会をはなれて，ヨーロッパに渡ったヘミングウエイは,この「誰が為に鐘は鳴る」の中で，社会との連帯意識をとりもどしたつもりなのでしょうが，残念ながら，現代は，それ程単純な世界になっていないのであります．「誰が為に鐘は鳴る」を以上のように，少しくわしく検討してきましたが，

主人公，ロバート・ジョーダンの戦争参加の正当性，それと関連したヘミングウエイの対社会観，を真理であるという普遍化をする程，高く評価することができなかったというのが事実であります．最後に，ヘミングウエイの長編小説作品を，時代別にならべて，全体的に鳥瞰してみますと，彼が，アメリカ社会，もっと大きく，人間社会全体に対する視点が，いかに狭い分野に限定されているか，気がついていただけるはずです．「日は又昇る」，「武器よさらば」は，ヘミングウエイは，戦争の時代の流れを利用し，そして，それは見事にかっさいを受け，「誰が為に鐘は鳴る」で，フアシストに対する時代の流れを直観的に捕らえ，多くの人々を感動させてきましたが，それが彼の一つの時流に対するポーズあることは，今までの検討で明確になってきたように思えるのです．確かに，人間を社会の一員として捕え，社会的展望をもった作品にしなければという彼の姿勢を，ポーズだと断定するのは酷かもしれませんが．しかし，彼が成しとげてきた全作品を，全体に見渡した時に，彼が故意にか，自然にか，どちらとも言いかねますが，忘却あるいは，切り捨て，取り上げなかったもの，そのものの意味が，あまりにも大きく，かつ，作品をつまらないものにしてしまったのではなかろうかと考えます．画一主義と実利主義のアメリカ中西部を逃げ出し，ヨーロッパ文化に失望した，ヘミングウエイの，信念にも似た肉体信頼思想は，彼の文学の中で，豊かな人間像を，ついに創造させることは出来なかったと見るのが，私の一つの彼に対する文学観であります．

3．結　文

以上，「誰が為に鐘は鳴る」を中心にして，ヘミングウエイ文学の限界を検討してまいりましたが，これを結ぶにあたって，福田氏の「老人と海」に関する意見を引いて，少しヘミングウエイ文学の肯定面をも見ておきたく思います．「……否定を肯定に転換することが必要です．『老人と海』で，かれははじめてその転換をかなり意識的にこころみてゐはしないでしょうか．いままで，かれの作品では，否定のあとに開かれた空洞を，もっぱら肉体的情念で埋めてゐたのですが，この作品では――ここでもあくまで肉体的行動にたよっておりますが――それが精神的に肯定されることによって倫理への通路が開かれてゐるやうにおもはれます．」[27] しかし，前回にも書きましたが，これは余りにも弱い肯定であるように思われます．人間は，その囲りのものから自由をうばわれがちですし，人間の尊厳を勝ち取るには，ある環境から，脱け出すために強くあらねばなりません．その為には，エネルギーが必要です．しかし，彼の場合，あまりにも肉体を信じすぎはしなかったでしょうか．人間は目ざめなければなりません．それは確かです．しかし，人間は自分の生をどうしたらよいのでしょうか．ヘミングウエイ文学は，それにどう答えてくれたのでしょうか．「宗教の提供する普遍目的感は虚偽である．人間は，どうしてもそう信じなければやっていけないために人間自身を重要で無比なものと信じる．だが，悲しいかな，真相は，人間は重要でも無比でもないということなのだ．」[28] という，ユリン・ウイルソンの現代人のな

やみに対して，彼の文学は，元気づけてくれるような答えを与えてくれなかったように思えるのであります．

注

(1) 福田恒存：西欧作家論．247，講談社．
(2) 佐伯彰一：ヘミングウエイ．全集8，466，三笠書房．
(3) 志賀　勝：アメリカ文学手帖．10，朝日新聞大阪本社．
(4) Ernest Hemingway: *The Sun Also Rises, Book* Ⅱ, Chapter XⅣ.
(5) 野崎　孝：Ernest Hemingway. 25，研究社．
(6) コリン・ウイルソン　福田・中村訳：アウトサイダー．221，紀伊国屋書店．
(7) Ernest Hemingway ：*Death in the Afternoon.* Chapter Ⅱ 11.
(8) コリン・ウイルソン　中村保男訳：アウトサイダーを超えて．26，竹内書店．
(9) Kurt Singer，石一郎訳：死の猟人〈ヘミングウエイ伝〉．24，荒地出版社．
(10) 佐渡谷重信：アメリカ小説論．145，泰文堂．
(11) Ernest Hemingway ：*The Snows of Kilimanjaro.*
(12) ハリントン，内田，青山訳：もう一つのアメリカ．24，日本評論社．
(13) 福田恒存：西欧作家論．249，講談社．
(14) 谷口陸男：ヘミングウエイ研究．201，三笠書房．
(15) Ernest Hemingway ：*For Whom the Bell Tolls.* Chapter XⅢ.
(16) Ibid.
(17) Ibid.
(18) 野崎　孝：Ernest Hemigway 57，研究社．
(19) Ernest Hemingway ：*For Whom the Bell Tolls.* Chapter XXⅥ.
(20) Ibid.
(21) 佐渡谷重信：アメリカ小説論．145，泰文堂．
(22) Ernest Hemingway ：*For Whom the Bell Tolls.* Chapter XⅢ
(23) Ibid.
(24) 野崎　孝：Ernest Hemingway 59，研究社．
(25) Ernest Hemingway ：*For Whom the Bell Tolls*, Chapter XⅢ.
(26) Ibid.
(27) 福田恒存：西欧作家論．251，講談社．
(28) コリン・ウイルソン　中村・福田訳：アウトサイダーを超えて．15，竹内書店．